

令和2年度 磐田市立磐田北小学校 学校評価書

重点	目標・取組	評価指標	自己評価	考察・改善策	学校関係者評価委員から
目標をもち、自己・他者・対象と対話し、学びを深める子供	本気で聴いて、つなげて考える子供	授業の内容がよく分かる 目標90%	A	<児童回答93.1%(昨年度90.5%)、教師回答78.0%(昨年度89.0%)> ○臨時休校で始まった令和2年度は、例年と異なるリズムで学習を重ねてきたが、児童評価は高い数値が見られた。授業の中核に対話活動を据えているが、コロナ禍で対話する場面を十分に設定できなかったという思いが職員の評価に表れた。 ※知識・技能を生かした学習活動を通して思考力・判断力・表現力が育まれることや、その過程を通して知識・技能が定着していくこと、主体的に調整しながら学習していくことの3点を目標と捉え、児童と一緒に授業をつくることを教師が意識する。	○多くの学級で静かに熱心に集中して授業に取り組む姿が見られた。 ○パソコンやタブレットを使った授業がされていて驚いた。このような授業が増えることに対し、眼への影響があるのではないかと心配した。 ○英語の授業では、発音までしっかりと指導されていてありがたいと感じた。 ○6年生の総合的な学習の時間では、20店舗以上の協力を得られた。子どもにとっても地域にとってもよい活動であった。 ○児童が理科教具の組み立てに苦勞する姿が見られた。ゲームの時間は多いが、実物をさわるとい経験は少ないのだろうと感じた。
		友達や先生の話をつなげようとして聞く 目標90%	A	<児童回答97.1%> ○評価指標を、昨年度まで「友達の発言につなげて考えられた子」だったが、児童の学びを深めていくために「聞く」ことに重点をおくこととし、本年度は「友達や先生の話をつなげようとして聞く」とした。児童の数値は大変高い評価で、「聞く」ことを意識することができていると捉える。しかし、そうでない児童も見られるので、指導の際には教師の立ち位置を変えたり、大型モニターを活用したりするなどの工夫をする。 ※高い評価が得られている点と小中一貫教育の観点から、来年度は「友達や先生の話をつなげようとして聞き、自分の考えと比べている」という評価指標を、学府内小学校部で統一した。	
い自分自身を尊重する心をもち、正しく判断し、よりよい	自分も人も大切に、挨拶・返事のできる子供	まわりの人にあいさつをしている 目標90%	A	<児童回答93.2%(昨年度90.0%)、教師回答77.0%(昨年度80.3%)> ○児童の数値の高さに意識の高さが表れている。朝の西門ではあいさつプロジェクトが行われ、和やかな雰囲気になってきている。このプロジェクトを実行している児童らは、教師の指導ではなく、主体的に動いている。友達同士誘い合って参加する児童も見られる。職員の評価は、あいさつに対して返事をしない児童も含めて全体的に捉えていることから低くなっている。 ※できていないことにはばかり目を向けるのではなく、学校や家庭、地域によって少しずつ育まれてきている児童の表れや思いを認め、励ましていく。	○あいさつは元気にできていてとても気持ちが良い。立ち止まって会釈をする高学年が素晴らしい。 ○道を歩いている児童と出会うと自分からあいさつをしてくれる。とても驚き、うれしく思っている。 ○あいさつに関して教師の評価が低いのは、あいさつ+1のプラスの部分ができているかどうか、評価の数値に表れているのではないかと。 ○教室や廊下がきちんと整理され、トイレのスリッパや昇降口の靴もきちんと整頓されていた。 ○ごみの分別がきちんとされていて素晴らしい。 ○休業明けの子どもたちの様子はどうか。→学校回答「落ち着いて学校生活を送ることができている。音楽や給食など制限は多いが、児童評価は低下していない」 ○教室掲示がかわいく、きれいになっていて、子どもを大事にしていることが伝わってきた。 ○アンケートから子どもたちが楽しく学校に通っていることは分かったが、先生方は楽しく勤務できているのか。どんな先生像を描いているのか。→学校回答「寄り添い、子どもの話を丁寧に聴く。子ども主体の授業づくりのために同僚同士で学び合い、教師自身が主体的対話的に学ぶ」
		学級にはお互いにルールを守り、協力する雰囲気がある 目標90%	B	<児童回答86.8%(昨年度81.0%)、教師回答83.0%(昨年度90.0%)> ○コロナ禍で学校の教育活動に制限があり、協力の場を多設定できなかったという職員の思いが数値に表れたが、学校生活の中ではルールやマナーを守る児童の姿が見られる。児童の数値は、目標に向かって年々向上している。 ※日々の学校生活から相手を思いやる雰囲気づくりに努めていく。児童の数値向上に対し、そう感じていない児童がいることを意識的に捉え、大切に見守っていく。	
		学校に楽しく通っている 目標90%	A	<児童回答91.6%(昨年度88.0%)、教師回答96.0%(昨年度96.0%)> ○昨年度まで到達していなかった児童の評価が目標に到達した。臨時休業明けには心身の影響を心配したが、現在では、新しい生活様式での学校生活に慣れてきている。 ※臨時休業によって、学校の存在意義を改めて問われたと考える。「学校はみんなで学んで楽しいところ」「学校は自ら学ぶ力を育むところ」「学校は保護者や地域の皆さんに支えられている」ことを再認識し、信頼される学校づくりに努める。	
いちしな心や難しさを乗り越えるための心戦いを	目標に向かって努力している 目標80%	A	<児童回答92.0%(昨年度90.6%)> ○7月評価79.7%、10月評価85.9%と数値の向上が見られた。新しい生活様式の中、学級一丸となって目標に取り組む活動(運動会や長縄大会など)は縮小化されたが、個人で目標をもって努力する活動(持久走記録会や短縄跳び)で、友達と一緒に励まし合いながら取り組む姿が見られた。 ※児童が主体的に活動できるよう工夫する。体育の学習カードの構成や賞揚の方法を工夫する。	○今年も持久走記録会があつてよかった。コロナ禍で縮小したり減ったりしてしまう行事もあるが、可能な取組は続けてほしい。 ○換気を意識していることがよく分かった。エアコンが整備されたおかげで教室の中では暖かさを感じた。	

学校関係者評価を受けてのまとめ

○パソコンやタブレットを使った学習や外国語の学習などの取組について、その利点を生かしていくことが重要である。その一方で、課題となること(眼への影響、実際の体験の不足)に対する手立てを忘れてはいけないと再確認した。学校だから友達と一緒に学ぶ楽しさが分かり、実体験できる活動もあるというよさを大切にしていきたい。  
○子どもたちが学校に楽しく通うためにも教師が学校に楽しく勤務するという発想を、現状よりも大事に捉えるという意識の転換が重要であると感じた。教師の働き方改革を子どもの学びの深まりにつなげると捉え、日課表の改善や各種会議の精選を通して、教師が主体的に対話的に学ぶ、同僚と学ぶということを実践していきたい。  
○地域にも広がりつつあるあいさつの輪を今後も広げていきたい。委員会活動のような子ども主体の活動を広げることだけでなく、プロジェクト活動のような子ども発心の活動も認め、推奨していく。